

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 26 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00782

研究課題名(和文)「旧朝鮮語学」の視点から見た日本近代朝鮮語教育史の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Study of History of Korean Language Education in Modern Japan:
Focusing on the Concept 'Old Korean Linguistics'

研究代表者

植田 晃次 (UEDA, Kozi)

大阪大学・大学院人文学研究科(言語文化学専攻)・教授

研究者番号：90291450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：旧朝鮮語学の人物を対象に、人物史と朝鮮語観を解明した成果に基づき旧朝鮮語学という視点からそれぞれの人物の位置づけを行った。詳細な人物史と書誌を明らかにした上で、従来とは異なる/初めての人物像を提示し、(1)典型的人物、(2)代表的人物、(3)その他の人物に類型化した。(1)は補充・再検討を行う必要が生じた伊藤韓堂・宝迫繁勝、(2)は弓場重栄・新庄順貞・島井浩、(3)は笹山章・松岡馨らを取り上げた。また、旧朝鮮語学の国外への影響、旧朝鮮語学での音声の認識と位置づけを明らかにした。以上により、旧朝鮮語学という概念の精緻化・体系化を図り、先行研究とは異なる朝鮮語教育史を総合的に構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究等では、人物を朝鮮・朝鮮語との関わりのみから見ることにより、「両国の架け橋」といった一面的な、また誤った人物像が示されていた。資料についても、原物を見ずに最終的な判断を下すことにより、影印やデジタル化された特定の資料に依拠して論ずることによる限界や誤謬が散見される。

本研究は、徹底した人物史主義・原物主義に基づき、新たに開発した方法も取り入れ、実証的に旧朝鮮語学の視点から人物の実像を示し、従来にない視点からの朝鮮語教育史の提示に成功した点で方法論の構築と具体的成果の両面で学術的意義を持つ。同時に現代の朝鮮語教育、さらには他の外国語教育にも示唆を与えうる点で社会的意義も持つ。

研究成果の概要(英文)： This study elucidated the real images of the authors of Korean texts in terms of their backgrounds and how they grasped the Korean language as a foreign language. Based on the results, we positioned each person focusing on the concept 'Old Korean Linguistics (OKL)'. Each of them was identified with detailed careers and bibliographies of their texts. As a result, new/unconventional portraits of them were presented, and they were classified into typical, representative and other authors. The study also clarified how 'OKL' influenced the Korean language education outside of Japan, and how the authors recognized and positioned speech sounds in 'OKL'.

In this way, we have elaborated and systematized the concept 'OKL' and comprehensively constructed a history of Korean language education that differs from previous studies.

研究分野：社会言語学

キーワード：朝鮮語教育史 旧朝鮮語学 朝鮮語 原物主義 人物史主義 朝鮮語学習書 韓国語 韓国語教育史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景 研究代表者・研究分担者は、2005年度以来、4件の科研費のご配慮により、日本近代朝鮮語教育史研究という分野を開拓し、理論構築するとともに基礎を築いた上で、学習書、人物、異文化接触・受容という視点から研究を遂行してきた。本研究開始当初には、それまでの研究で確立した、原物主義・人物史主義・現地主義という方法論によって、「旧朝鮮語学」という概念の視点に基づき、日本近代朝鮮語教育史を総合的に検討し、理論的枠組みとして再構築する必要性に想到した。

これを図示したものが下図である。

2018～2022年度 基盤研究(C)
「旧朝鮮語学」の視点から見た日本近代朝鮮語教育史の総合的研究」
「旧朝鮮語学」という概念を精緻化・体系化し、その視点から朝鮮語教育史を再構築

2014～2016年度 基盤研究(C)
「異文化接触・受容の視点から見た日本近代朝鮮語教育史の総合的研究」
2005～2013度の事例研究を異文化接触・受容の視点から理論的枠組として再構築

2008～2010年度 基盤研究(B)	2011～2013年度 基盤研究(C)
学習書を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究	「人物を通して見る近代日本における朝鮮語教育史の多元的・実証的研究」
対象：朝鮮語学習書	対象：朝鮮語学習書を著した人物(著者)
方法論の確立：「人物史主義」・「原物主義」・「現地主義」	

2005～2006年度 基盤研究(B)
「日本における朝鮮語教育史の総合的・実証的研究」
概略の素描・基礎データ作成

2. 研究の目的

本研究は、これまでの研究で確立した、原物主義・人物史主義・現地主義という方法論に基づき、旧朝鮮語学という概念の視点から日本近代朝鮮語教育史を総合的に分析し、近代日本人と朝鮮語との関わりについて明らかにするものである。旧朝鮮語学とは、「朝鮮語」(実用語学としての話しことば)と「朝鮮文」(行政・教育等で用いられる書きことば)から成る。これは、わずかな専門家による言語学的学術研究とは画然と区別される、主に一般人によって担われた語学教育・語学学習の営為である。本研究では、旧朝鮮語学の担い手と学習書を手掛かりに、人物の生涯の中で朝鮮語を位置付ける「人物史」、その人物が朝鮮語を言語学的に如何に分析・把握したか/できなかったかという「朝鮮語観」の2要素の解明により、朝鮮語に接した近代日本人がそれを如何に学び、捉え、教えたのかという側面から旧朝鮮語学という概念を精緻化・体系化する。そして、その視点から朝鮮語教育史を総合的に再構築し、ひいては人間と言語の関わりを現代の外国語教育をも念頭に置き明らかにする。

3. 研究の方法

旧朝鮮語学という概念の精緻化・体系化を行うため、旧朝鮮語学関連人物の経歴・学習書から人物史・朝鮮語観を分析し類型化する。

既におよそ分析を行った、比較的整った学習書の著者である「代表的人物」(薬師寺知[日龍]・伊藤伊吉・奥山仙三など)、主にそれに準ずる「典型的人物」(弓場重栄・新庄順貞・島井浩など)とその学習書を対象として、これまで開発した調査方法により人物史の解明・系譜の体系化を行う。同時に、これらの人物が残した学習書に表れた朝鮮語観、すなわち、朝鮮語の音韻・表記体系・語彙・文法等の記述を朝鮮語学・言語学的に分析する。続いて、より周縁的な「その他の人物」(松岡馨・川辺紫石など)を対象とする。これらの人物についても、代表的人物・典型的人物の分析と同様の方法により人物史と朝鮮語観を解明する。

さらに、旧朝鮮語学という概念の視点から、人物史と朝鮮語観を統合して近代日本人と朝鮮語との関わり、すなわち旧朝鮮語学とは何であったのかという問題を総合的に解明する。研究代表者が書誌学的基礎データの構築、人物史の調査・分析を、研究分担者が朝鮮語観の調査・分析を担当する。そして、それぞれの結果について相互検討を行い人物史と朝鮮語観を統合する。

4. 研究成果

上記の目的・方法に基づき得た主な成果は以下のとおりである。

(1) 補充・再検討を行う必要が生じた代表的人物の研究を行った。

伊藤韓堂(卯三郎)について、従来知られていなかった点も含め詳細な人物史を明らかにし、新聞記者から「算盤をはじく」出版社経営者兼執筆者となった人という、新たな人物像を明らかにした。さらに、先行研究の一部での根拠なき推測による誤りや研究倫理上の問題点も示した。宝迫繁勝の『韓語入門』・『日韓善隣通語』の底本を明らかにし、朝鮮語学からの位置づけを行った。この発見は研究分担者が第70回朝鮮学会大会(2019年10月6日)の口頭発表で公開した(『朝鮮学報』254輯101-102頁参照)。また、宝迫の没年を明らかにするなど人物史でも新たな発見があった(研究代表者の「『旧朝鮮語学』と『戦後』の朝鮮語教育の断絶と連続性小攷」『批判的社会言語学の現在』大阪大学、印刷中を参照)。

(2) 典型的人物の研究を進めた。

弓場重栄について、詳細な人物史と学習書の書誌を明らかにしたうえで、銀行員という側面から弓場の人物史を再検討して新たな人物像を明らかにした。新庄順貞について、新たに開発した公文書を用いる方法によって明らかにした詳細な人物史と関連する書誌に基づき、元参謀本部朝鮮国語学生徒という人物史の側面から旧朝鮮語学に位置づけた。島井浩について、詳細な人物史と書誌を明らかにしたうえで、島井の学習書を日本近代の出版という文脈の中で再解釈し、1つの分析方法を提示した。さらに、従来の「朝鮮語(および日本語)の普及者」・「両国の架け橋」・「韓国語専門家」等とは異なる、対馬から釜山の日本人社会に渡り一生を送った人という位置づけを示した。

(3) その他の人物についての研究を進めた。

笹山章について、詳細な人物史と書誌を初めて明らかにしたうえで、人生を切り拓く着脱可能なアイテムという概念を用いて朝鮮語を解釈し、朝鮮語普及者という単純な評価はなし得ず、朝鮮で教育に従事し朝鮮語を学んだ多くの日本人の1人であったと結論づけた。松岡馨について、先行研究でほとんど不詳とされていた人物史を実証的かつ詳細に初めて明らかにするとともに、学習書の書誌を原物主義に基づき提示した。そのうえで、賊軍となった奉行の御曹司という生い立ちや数学教師といった朝鮮語と関わらなかった側面を含め、松岡の人物像を明らかにした。このほか、公表には至っていないが、これまでほとんど取り上げられなかった川辺紫石や斎藤助昇の人物史をある程度明らかにした。また、武田甚太郎・山崎英夫・住永琇三・村上唯吉などについて、新たな史資料を発掘した。

(4) 旧朝鮮語学の国外への影響について明らかにした。

ロシア・東洋学院のG.V.Podstavin教授の人物史を明らかにしたうえで、同校での教科書『朝鮮語独学の分析』の底本が少なくとも旧朝鮮語学の学習書である『実地応用朝鮮語独学書』・『日韓通話』であることを実証的に明らかにした。これにより、日本の旧朝鮮語学の影響が国外に及んでいたことが明らかになった。

(5) 旧朝鮮語学において音声がどのように記述・認識されていたのかを同時代の欧米での言語教育と対照を試みることによって、旧朝鮮語学の音声の位置づけと認識の様相を明らかにした。

(6) 旧朝鮮語学という概念の精緻化・体系化を図った。

従来の成果に(1)~(5)の新たな成果を加え、旧朝鮮語学の人物を類型化して旧朝鮮語学に位置付ける際の視点について検討した。また、旧朝鮮語学の内容・性質について、より深化した定義づけを行う条件を検討した。

(7) 学習書のデータを補充・整備した。

従来の公共図書館に加え、市立図書館や大学図書館の蔵書の調査を行い学習書のデータを補充・整備した。

2020~2022年度の実施状況報告書に記載の通り、研究代表者の論文「日本近代朝鮮語教育史の視点から見た松岡馨と朝鮮語」、研究分担者の論文「旧朝鮮語学における音声の認識と位置づけ」の投稿は採用され出版準備中であるという回答は得ているものの(当該委員会からの2020年9月16日付メール)、2023年5月26日現在依然として刊行されないままにある。

なお、当初予定した現代日本の朝鮮語教育と旧朝鮮語学の共通性の解明には本格的に取り組むには至らず、今後の課題となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 植田晃次	4. 巻 49
2. 論文標題 日本近代朝鮮語教育史の視点から見た島井浩と朝鮮語 - 対馬から釜山の日本人社会に渡り一生を送った人 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 5-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/90943	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 植田 晃次	4. 巻 48
2. 論文標題 旧朝鮮語学の国外への影響 - ロシア・東洋学院G.V.Podstavin教授をめぐって -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 3~19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/87083	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 植田晃次	4. 巻 47
2. 論文標題 銀行員・弓場重栄と朝鮮語 - 日本近代朝鮮語教育史の視点から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 3-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/79322	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 植田晃次	4. 巻 45
2. 論文標題 日本近代朝鮮語教育史の視点から見た伊藤韓堂（卯三郎）と朝鮮語 - 新聞記者から「算盤をはじく」出版社経営者兼執筆者となった人 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化研究	6. 最初と最後の頁 17-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/71630	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 植田晃次	4. 巻 5(下)
2. 論文標題 日本近代朝鮮語教育史の視点から見た笹山章と朝鮮語 - 人物史と著書を通して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本語文化研究	6. 最初と最後の頁 89-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 植田晃次
2. 発表標題 日本近代朝鮮語教育史の視点から見た松岡馨と朝鮮語 - 人物史と著書を通して -
3. 学会等名 第6回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 植田晃次
2. 発表標題 元参謀本部朝鮮国語学生徒・新庄順貞と朝鮮語 - 日本近代朝鮮語教育史の視点から -
3. 学会等名 第70回朝鮮学会大会 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢野謙一
2. 発表標題 旧朝鮮語学における音声の認識と位置づけ
3. 学会等名 第6回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢野謙一
2. 発表標題 竇迫繁勝『日韓善隣通語』と『韓語入門』の原本について
3. 学会等名 第70回朝鮮学会大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 植田晃次
2. 発表標題 銀行員・弓場重栄と朝鮮語 - 日本近代朝鮮語教育史の視点から -
3. 学会等名 第69回朝鮮学会大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	矢野 謙一 (YANO Ken'ichi) (00271453)	熊本学園大学・外国語学部・教授 (37402)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------